



日语的及物动词句和 不及物动词句研究

——以事件结构理论为中心

刘 剑



张外借

外语教学与研究出版社



日语的及物动词句和 不及物动词句研究 ——以事件结构理论为中心

刘 剑 著

外语教学与研究出版社
北京

图书在版编目 (CIP) 数据

日语的及物动词句和不及物动词句研究：以事件结构理论为中心 / 刘剑著. ——
北京：外语教学与研究出版社，2018.12
ISBN 978-7-5213-0599-9

I. ①日… II. ①刘… III. ①日语—动词—研究 IV. ①H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2018) 第 292513 号

出 版 人 徐建忠
项目策划 杜红坡
责任编辑 戚 新
责任校对 王晓晴
封面设计 彩奇风
出版发行 外语教学与研究出版社
社 址 北京市西三环北路 19 号 (100089)
网 址 <http://www.fltrp.com>
印 刷 北京九州迅驰传媒文化有限公司
开 本 650×980 1/16
印 张 12
版 次 2019 年 1 月第 1 版 2019 年 1 月第 1 次印刷
书 号 ISBN 978-7-5213-0599-9
定 价 49.00 元

购书咨询：(010) 88819926 电子邮箱：club@fltrp.com

外研书店：<https://waiyants.tmall.com>

凡印刷、装订质量问题，请联系我社印制部

联系电话：(010) 61207896 电子邮箱：zhijian@fltrp.com

凡侵权、盗版书籍线索，请联系我社法律事务部

举报电话：(010) 88817519 电子邮箱：banquan@fltrp.com

物料号：305990001



记载人类文明
沟通世界文化
www.fltrp.com

谨以本书献给矢泽真人教授

自序

1. 本书的目的和意义

本书的研究对象是现代日语中的及物动词句和不及物动词句。及物/不及物动词这对概念，来自英语的transitive/intransitive verbs。而transitive/intransitive verbs在日语里则对应的是「自動詞/他動詞」。为了消除不同译词之间由于不同语言背景而产生的差异，本文正文里依然把这一对概念称为「自動詞/他動詞」。

关于日语里的及物动词和不及物动词的先行研究不计其数。整体上可以分为两种类型。一种是基于传统日本语学的研究，以形态为中心，虽然兼顾意义，但对语义的涉入不深。而以影山(1996)为代表的现代语义学研究，虽然以语义为中心，兼顾形态，但其语义与形态之间的巨大齟齬总是遭到后续研究的诟病。所以从现状来看，仍然有非常多的问题等待解决。而本书的目的，是想要先追踪出这种齟齬为什么会产生。

为了追踪这个齟齬的产生，本书以句子为单位对及物/不及物动词进行考察。前文提到，日语里关于及物/不及物动词的先行研究不计其数，但其中以句子为单位的研究尚不多见。本书从语料库中提取真实的句子，以句子为出发点，对及物/不及物动词进行考察，并依据认知语言学中的Event Structure 理论对其进行重新整理。综上所述，以句子为单位，结合认知语言学与语料库研究日语的及物/不及物动词，是本书的创新之处，也是意义所在。

2. 本书的构成和各章概要

2.1 本书构成

第一章 绪论

第二章 先行研究

第三章 Causal Relationship

第四章 从「他動詞」的角度看[—cause]语义关系 I

第五章 从「他動詞」的角度看[—cause]语义关系 II

第六章「他動詞」的语义结构小结

第七章 从「自動詞」的角度看[—cause]语义关系

第八章 以动词的时相(aspect)变化证明以上假说

第九章 结论

2.2 各章概要

第一章, 首先, 从本文的角度界定、明确一些基本概念。比如, 及物动词和不及物动词这一对概念, 从形式上定义, 可以以要不要带宾语, 即宾格助词「を」来判断。但以形式为标准, 无法解决一些问题, 典型的比如移动「を」格的问题, 「魚が池を泳いでいる」就是一个带「を」格, 却很难解释为及物动词的例子。从语义上定义, 就是语义里有没有「働きかけ」, 但语义常常是界限模糊的, 很难形成一个可计量的标准。本书对这类历史遗留下来的问题统一从Event Structure的角度重新予以定义。其次, 明确本书的目的、意义、研究思路、研究方法等, 并简述论文构成。

第二章, 研究综述。从传统和现代两条线索系统整理跟及物/不及物动词有关的先行研究, 分析其意义, 找出其问题, 并澄清本书可以对其进行怎样的补充、完善, 以及本书是如何在先行研究的基础上进行突破和创新的。

第三章, 首先, 阐述本书使用的理论, 整理其发展脉络, 包括(I)在认知语言学之前的阶段, (II)认知语言学的阶段, 和(III)该理论被引入日本后在日本的发展等。Langacker认为, 对于同一个事件(event)或事物, 由于感知主体有着不同的视角, 其观察、认识、

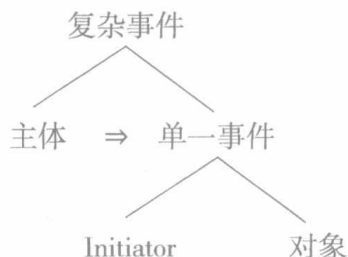
理解客体的过程也不同，客体在大脑中形成的表象也就不同。这个表象的形成，与感知主体如何过滤客体有关。被过滤或忽视的部分，成为背景；被保留、聚焦的部分，成为前景。同样的道理，每个语言在表达同一个事件时，都会选择不同的表达方式，同一个事件中的某些环节被前景化，另一些环节则被背景化。比如“张三打了李四”这个事件，可以用被动式来表达：“李四被张三打了”，这个被动式可以省略成“李四被打了”，这时动作发出人“张三”就被背景化了。而“李四被打”依然在前景。但事件总有一个真值，张三发出了打的动作，有一个力从张三那里传递到了李四那里，李四接收到这个力，并产生(或不产生)变化。虽然语言不同，表达方式不同，但真值，也就是力的传递是不变的。本书采用William Croft的Causal Chain的模型，来标记这个真值，也就是力的传递方向。其次，从词典中选出所有的常用及物/不及物动词，形成清单。再以这张清单上的动词为考察对象，在语料库中查找，并大规模抽取这些动词的实用例句，然后逐一使用上述Causal Chain理论来进行分析，考察它们能不能通过该模型的测试，最终得出可以进入和无法进入Causal Chain的及物动词句/不及物动词句，并以后者为考察、分析的对象，也就是考察其语义中哪一部分以怎样的方式被背景化了。对无法通过Causal Chain测试的及物动词句，在第四、五章中展开分析，在第六章中进行小结。而对无法通过Causal Chain测试的不及物动词句，在第七章中展开分析，并在第八章中验证该分析所提出的结论。

第四章，分析其中一种无法进入Causal Chain的及物动词句。这种句子可以对应先行研究中所谓的「介在性の表現」。本书用更充足的句子实例对其进行基础数据的补足，并从Event Structure的角度对其进行重新的整理，在理论的高度上对原有的先行研究进行改善。第五章则分析另一种无法进入Causal Chain的及物动词句。这种句子可以对应先行研究中所谓的「状態变化主体の他動詞文」。本书同样用更充足的句子实例对其进行基础数据的补足，并从Event Structure的角度对其进行重新的整理，在理论的高度上对原有的先行研究进行改善。

第六章，运用Event Structure理论对上述两种现象进行统一的说

明。除了通过传统意义上的语义素分析可以看出这两种现象共有<意志性><働きかけ性>等语义素之外,从Event Structure的角度看,两者都不是像一般的动词那样表示单一事件(single event),而是表示复杂事件。这个复杂事件中包含着单一事件。可以用下图来表示:

(1) 复杂事件及物动词的语义结构



也就是说,在一般的动词所表示的单一事件之上,再添加一个主体,形成复杂事件。这种一个动词语义结构中可以包含复杂事件的现象,目前除了日语还未在其他语言中找到同类。

第七章,关于无法进入Causal Chain的不及物动词句的考察和分析。与及物动词语义结构的添加主体相反,不及物动词的情况则是在一个Causal事件中人为地去掉一个主体。比如不及物动词「煮える」,如果没有一个主体去做「煮る」这个动作,客体不可能自己变成「煮える」这个样子。也就是说,这不是一个客体自为的变化,而一定有一个动作发出者——主体的存在。但在「煮える」这个不及物动词的语义结构中,这个主体被人为地去掉了。日语中这样的不及物动词大量存在,如「建つ、植わる」等。

第七章所述的不及物动词并非如影山(1996)所阐述的那样在形态上有[-aru]特征,而是在语义上有<瞬間性>特征,就是在时间上没有延续性,都是一个瞬间的变化。从Vendler的分类法来看,都属于达成性动词。在第八章,使用语料库统计法,对这个种类的不及物动词进行验证,从数据的倾向性来说明其时间上的瞬间性特征。

第九章,总结整篇论文,并指出本书的缺点和尚无法完成的问题,留作今后的研究课题。

3. 感谢的话

感谢日本筑波大学矢泽真人教授在作者博士期间给予的无微不至的照顾和悉心的指导，也难忘在笔者归国工作后矢泽老师从未间断的提携和教诲，这是更为难得的。如果没有如此幸运地遇到矢泽老师，本书很难面世。

感谢北京大学日语系的全体老师、大连外国语大学的陈岩教授给予笔者的教导和帮助，感谢东北财经大学国际商务外语学院车丽娟教授、唐向红教授在工作中给予笔者的关怀和指导。也感谢家人默默地支持和付出。

最后，这是笔者的第一本学术专著，虽然在此时此地已经倾尽了全部的脑力和体力，但由于资质不足、资历尚浅和经验欠缺，一定会存在非常多的问题，希望同侪给予批评和提点，涕零感激。

目次

第一章 序章	1
1. はじめに	1
2. 本書の目的と意義	27
3. 本書の構成	27
第二章 先行研究	30
1. はじめに	30
2. 形態中心の日本語の自他に関する研究	30
3. 意味中心の自他交替に関する研究	43
第三章 Causal Relationship	47
1. Causal Chain	49
2. その他の先行研究	59
3. Causal Relationに関するさらなる記述	64
4. 実例の動向	67

第四章 他動詞の面からみた[－cause]の関係Ⅰ … 76

1. 現象 ……………76
2. Causal Chainの観点からの分析 ……………83
3. まとめ ……………89

第五章 他動詞の面からみた[－cause]の関係Ⅱ … 91

1. 現象 ……………91
2. Causal Chainの観点からの分析 ……………99
3. まとめ …………… 108

第六章 他動詞の意味的構造の全体像…………… 109

1. 「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」との共通点 …………… 110
2. 複雑事象の成立条件 …………… 112
3. 他動詞の意味的構造の全体像 …………… 117
4. 他動詞の意味的構造の全体像の再整理 …………… 127

第七章 自動詞の面からみた[－cause]の関係 …… 132

1. はじめに …………… 132
2. 先行研究および再分析 …………… 135
3. 本書の枠組みからの検討 …………… 142

第八章 アスペクト形式からの仮説検証.....	149
1. はじめに	149
2. 実例の動向	150
3. 「+単一事象」自動詞との違い	159
4. 終わりに	162
第九章 終章.....	164
1. 本書の結論	164
2. 今後の課題	170
参考文献.....	172

第一章 序章

1. はじめに

日本語には、同一の語根のもとに、さまざまな語尾変化が付いて、動詞が形成されるシステムが存在する。このような同一の語根のもとに形成された自動詞と他動詞の関係を扱う先行研究は、大きく二つのパターンに分けられる。一つのパターンは日本語学の伝統的な自他の捉え方に即した「自他対応」と呼ばれるもの¹であり、もう一つのパターンは西洋流の自他交替 (transitivity-alternation) という観点の影響を受けたもの²である。前者は主に形態を中心としており、後者は主に意味を中心としている。伝統的な自他の研究は形態から意味へアプローチし、西洋流の影響を受けた自他の研究は意味から形態へアプローチするなら、両者はうまく合流することが期待されるが、しかし、実際に両者の間に大きなギャップがある。伝統的な自他対応では、意味に関する統一した定義と基準を与えていない。つまり、自動詞と他動詞のそれぞれのメカニズムを明らかにしていない。一方、西洋流の自他交替では、自動詞と他動詞のそれぞれのメカニズムを明らかにしているが、そのメカニズムに動詞の形態を当てはめようとしても、うまく当てはま

1 便宜のため、この立場の先行研究を「自他対応」の立場の先行研究と簡略的に記す。

2 便宜のため、この立場の先行研究を「自他交替」の立場の先行研究と簡略的に記す。

ない。1.1節－1.2節では、この二つのパターンの先行研究とその間のギャップを詳しく見る。そして、1.3節では、それに基づいて、本研究の代案を提示する。

1.1 従来の自他対応の定義および問題点

1.1.1 従来の自他対応の定義

動詞の自他対応に関する研究は従来多数ある。ただ、自他対応を初めて形態、構文（統語）、意味の三つの面で明確に形式化して定義づけたのは、奥津（1967）であった。奥津（1967）は自他対応を以下の通りに規定している。

(1¹) 自・他の対応とは、次の二文

- (i) N1 ga N2 o [+V, +Transitive, X, Y]
- (ii) N2 ga [+V, -Transitive, X', Y']

において、 $Y=Y'$ なる時、 $[+V, +Transitive, X, Y]$ $[+V, -Transitive, X', Y']$ で表される二動詞間の関係を言う。

（奥津 1967 : 61²）

奥津（1967）以後、日本語の動詞の自他対応が、基本的に、意味、形態、統語の三つの条件が満たされている場合に成り立つという観点はほとんどの先行研究に引き継がれている。以下では、佐藤（1994a）がまとめた三つの条件を挙げる。

(2) 自他対応の定義

- a. 意味的条件 自動詞文と他動詞文が同一事態の側面を叙述していると解釈可能である。
- b. 形態的条件 自動詞と他動詞が同一の語根を共有している。
- c. 統語的条件 自動詞文のガ格と他動詞文のヲ格が同一名詞句で対応している。

1 例文番号を含め、本書によって一部改変。

2 ページ数は須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』（1995）による。

(3) 自他対応の実例

- a. 鉛筆が 折れる。
- b. 太郎が 鉛筆を 折る。

(佐藤 1994a : 21)

佐藤は(3)について、以下のような説明を加えている。

(3¹) に示した「折れる－折る」の例は(2)の条件をすべて満たすものである。すなわち、(2a)の意味的条件に関して、自動詞文(3a)と他動詞文(3b)は同一の事態の側面を叙述するものとして解釈可能である。また、(2b)の形態的条件に関して、(3a)におけるor-e-ru(折れる)と(3b)におけるor-u(折る)は同一の語根orを共有している。更に、(2c)の統語条件に関して、自動詞文(3a)のガ格と他動詞文(3b)のヲ格は同一名詞句「鉛筆」で対応している。

(佐藤 1994a : 21-22)

1.1.2 問題点

1.1.2.1 以上の定義に当てはまらないケース

奥津(1967)や佐藤(1994a)をはじめとした自他対応の定義は明らかで、有効な定義であると認めるものの、この定義に部分的に当てはまらない例の処置が問題となってくる。たとえば、「入る－入れる」、「消える、消す」のようなペアは、直ちに(2b)の形態的条件に当てはまらない。「入る－入れる」を例にして説明する。自動詞の「入る」は「hair-」という語根を持ち、他動詞の「入れる」は「ir-」という語根を持つ。両者は同じ語根を共有するとは言えない。しかし、意味上、「入る」はよく「入れる」と対応し、統語上でも対応することができる。つまり、(2a)の意味的条件と(2c)の統語的条件は満たすにもかかわらず、(2b)の形態的条件だけが満たさない場合は、自他対応と見なすか否かは、さらなる検討する余地がある。

1 BCCWJで調べたら、「が切れる」のヒット数は284件。中に「期限が切れる」が一番多く、62件。「糸が切れる」は二位で38件。

また、以下のペアは、(2c)の統語的条件に当てはまらない。

(4) 漢語動詞の非能格動詞—対格動詞対応

NP1ガ NP2ヲ Vする

NP1ガ Vする

(5) 実例

a. 二大スターが ミュージカルを 共演する。

b. 二大スターが 共演する。

(楊 2010 : 15)

(5a)と(5b)は、(2a)の意味的条件と(2b)の形態的条件を満たしている。(5a)と(5b)における「共演する」は同一事態の側面を叙述すると解釈可能である。また、(5a)における「共演する」は、(5b)における「共演する」と、同じ語根を持つ。しかし、この二文は、(2c)の統語的条件は満たさない。(2c)は、他動詞のヲ格(目的語)が自動詞のガ格(主語)に対応すると規定するが、(5b)の自動詞の主語(二大スター)に対応しているのは、(5a)の他動詞文のヲ格(ミュージカル)ではなく、ガ格(二大スター)である。このようなペアは従来の自他対応の定義に当てはまらないため、自他対応から除外しないといけませんが、しかし、本当に除外して妥当なのか。

さらに、(2a)の意味的条件に当てはめるために、奥津が指摘した「 $Y=Y'$ 」という条件を満たさないといけない。言い換えれば、「同一事態」の側面を叙述するという条件を満たすために、他動詞文のヲ格名詞と自動詞文のガ格名詞が同一の名詞でなければならない。それによると、本居春庭が指摘した「みつから然る」ことを表す自動詞と「ものを然する」ことを表す他動詞、たとえば、「伏す—伏する」のようなペアは、自他対応から除外しなければならない。「みつから然る」ことを表す自動詞「伏す」は、「ハルは、もともと体が弱く、月のうちの半分は床に伏すような生活であり、健康になることが願いであった」のような、「人が伏す」の例がほと

んどである。「ものを然する」ことを表す他動詞「伏する」（現代語では「伏せる」）は、「読みかけていた本を枕の横に伏せる」のような、「ものを伏せる」の例がほとんどである。「人が伏す」に対応する「人を伏せる」の例は見つからなかった。本居春庭は「伏す一伏する」を自他の対応として扱っているが、奥津（1967）以来の定義によると、自動詞と他動詞は同一事態の側面を叙述すると解釈しにくいいため、自他対応から除外しなければならない。現代語にもこのような例がある。たとえば、「風が吹く」と「笛を吹く」においては、N2が違う名詞句（他動詞文ヲ格名詞は「笛」、自動詞文ガ格名詞は「風」）であり、同一事態の側面を叙述すると解釈しにくいいため、(2)の定義によると、自動詞「吹く」と他動詞「吹く」とは自他対応しているとは見なすことができない。

さらに、他動詞文のヲ格が自動詞文のガ格が同じ名詞句の場合でも、同一事態を叙述していない場合がある。たとえば、「切れる」と「切る」というペアを例にして見てみよう。

- (6) a. 太郎が 糸を 切る。
 b. 糸が 切れる。
 (7) a. * 銀行が クレジットカードの期限を 切った。
 b. クレジットカードの期限が 切れた。

(6)と(7)に関して、(2b)の形態的条件からみると、「切れる」と「切る」は「kir-」という語根を共有し、(2c)の統語的条件からみると、「切れる」と「切る」は、「NP1ガNP2ヲ切る」－「NP2ガ切れる」というような統語対応も成立している。つまり、(2b)と(2c)は満たしている。しかし、(2a)の意味的条件はどうだろうか。(6a)と(6b)は同一事態の側面を表すと解釈可能であるが、(7a)と(7b)は同一の事態の側面を叙述しているとは考えられにくい。(7b)に対応する(7a)は成り立たない。「期限を切る」の例は「今度も党則を改正して任期延長の期限を切っておかないと、中曽根を辞めさせられなくなるぞ」のようなものである。この例における